

新進芸術家海外研修制度 研修結果報告書

研修開始年度 | 令和 3 (2021) 年度

分 野 | 音楽 (声楽 (メゾ・ソプラノ))

研 修 先 | オランダ (アムステルダム、デン・ハーグ)

研 修 期 間 | 1 年研修

氏 名 | 輿石 まりあ

1. 研修目的（課題）

オランダ国立オペラアカデミーでオペラを専門的に学ぶことにより、オペラ歌手としての総合的な能力を育てる。

2. 研修日程

研修先 : オランダ国立オペラアカデミー

所在地 : オランダ（アムステルダム、デン・ハーグ）

指導者 : ポール・マクナマラ（芸術監督）

研修期間 : 令和3(2021)年9月1日～令和4(2022)年7月28日

3. 研修内容、成果

A) 研修課題の題目

【課題】

オランダ国立オペラアカデミーでの本公演や各種演奏会、授業等を通して、世界的に活躍できるオペラ歌手を目指す。

【研修内容・方法】

この題目を達成するために、オランダ国立アカデミーでは一年間を通して5演目にわたるオペラ公演のほか、毎週1回の声楽レッスン、2～3回のコレペティトアとのレッスン、演技の授業、身体の使い方の授業、論文、オペラプロダクションに関するディベート講義、各種マスタークラス等を受けました。

B) 研修の成果

大幅に達成できた

この一年間を通して、研修課題を大幅に達成することができました。

一年前、研修以前の自分を思い返してみると、この研修を通して、歌手としても、そして一人の人間としても随分と成長させていただきました。本当にたくさんの学びが日々の舞台経験、レッスン、コーチングであったのですが、この一年での一番の大きな成果は、感情と身体が密接に繋がっている、という事を、身体を通して納得出来た、ということです。深い呼吸をして、



グラウン『クレオパトラとチエーザレ』
チエーザレ役（左）© Reinout Bos



モーツァルト『魔笛』侍女3役（左）
© Reinout Bos

身体全体から声を出す、という事は、とてもシンプルで、かつ人間の第一次的な行為・欲求であり、今までの成長過程でついた癖や心の傷、性格、メンタルブロックなどが、呼吸に大きく関わっているという事、つまりそれらは歌に顕著に現れるということ、身をもって体感した一年間でした。自分の歌と向き合うという事は自分自身と向き合う、という事であり、自分が精神的に成長し、自分の弱さを受け入れられるようになればなるほど、歌う事、舞台上で表現をする事が自由になっていきました。そして、観客の前で歌を歌うという事は、自分の弱さを本当の意味で曝け出すという事であり、そしてその事によって、観客が自分の心の深いところに戻れる時間やきっかけを提供することなのだ学びました。

この一年間は、私の長い学生生活の最後の一年間だったのですが、今回得たこの大きな気づきを通して、自分がなぜ歌を歌っているのか、歌を通して何を社会に貢献していきたいのかという大きな問い（この問いは生涯完璧に解けることがないのだと思うのですが）の答えの基盤になるものが出来たと思いますし、生涯を通して歌手として生きていく覚悟、音楽と、そして自分と向き合っていく覚悟ができました。

もちろん、アカデミーを通してたくさんのオペラの舞台を経験し、レッスンやコーチング、授業を通してたくさんのことを学びましたが、表面的な知識やテクニックよりももっと大切なことを教えていただいた一年間でしたし、この研修で得たものはこれからの歌手人生を支えてくれるものだと思います。深い学びができたのは、この研修制度によって経済的に支えていただいた事で、アカデミーでのプログラムに集中できたおかげです。

C) 研修成果の活用計画

国内外のオペラのプロダクションや演奏会等で歌い、今回学んだことを活かしていきたいです。まずはヨーロッパやアメリカの歌劇場やエージェントのオーディションを受け、歌える場所を増やす努力をしていきたいです。2023年以降は少しずつオペラのお仕事をいただいているので、次に繋げられるように尽力したいと思います。また、オペラ歌手として経験を積んだ後には、日本の後進の指導にあたりたいと考えています。

D) 研修国の情報

私が研修を行ったオランダ国立オペラアカデミーは、アメリカ的な教育方法をとっており、一人の声楽の先生のみで歌手としての成長を頼るのではなく、様々な専門家が様々な角度（発声、発語、演技、身体の使い方、オペラ制作の観点、メンタルヘルス等々）から一人の歌手を教え、皆で協力しながらレベルアップを図る、というものでした。この方法は、ヨーロッパの他のオペラ歌手教育機関では滅多にみられ

ないことで、このような環境で勉強出来たことは本当に恵まれていたと思います。また、先生生徒共に国際色が本当に豊かで、オランダ人の先生生徒の割合は全体の約10%ほどでしたし、それ以外の人たちも、同じ国の出身者が複数いる、ということはほぼありませんでした。このことによって、アカデミーにいただけでたくさんの文化交流ができましたし、多国籍・多文化な環境の中にいる、ということも含めて、プロフェッショナルな現場の再現ができていないかと思っています。ただ、オランダ国内の他の音楽院は、ここまで充実したプログラムを提供できている訳ではなく、それは非常に残念なことだなと思います。また、オランダ国内はオーケストラや古楽は盛んではあるものの、オペラはあまり盛り上がっておらず、アカデミーでの教育も、隣国であり世界最大のオペラのマーケットであるドイツでの就職を視野に入れたもので、ドイツに特化したオーディション関係のセミナーや、本公演にもドイツ語のセリフのある演目を取り入れるなどしていましたが、同級生・卒業生の約半分はドイツを拠点に仕事をしています。とても良いプログラムであるゆえに、オランダ国内でその成果を使う場面があまり用意されていないのは勿体無いなと感じています。

オランダはオペラの留学先として日本ではあまり知られていない国だと思います。上記のような事はあるものの、このアカデミーは本当に素晴らしい経験ができる所なので、日本の後進たちにきちんとこのアカデミーの存在を知ってもらうべく、何か活動が出来たら良いなと思っています。